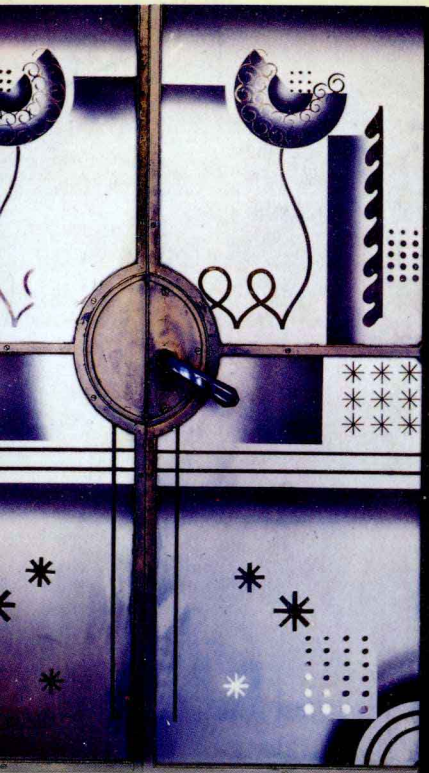
昭和生まれの季語と佳句

山下一海

昭和歳時記



昭和になって盛んに用いられるようになった多くの季語は、活発な都市生活を反映し、外来語をふくめ、魅力的なものが多い。新しいイメージをもったこうした季語の生成の事情や背景について、例句をあげながら解説し、われわれの生きた時

角川選書
196

角川選書——196

昭和歳時記

平成二年五月三十一日　初版発行

著者——山下一海

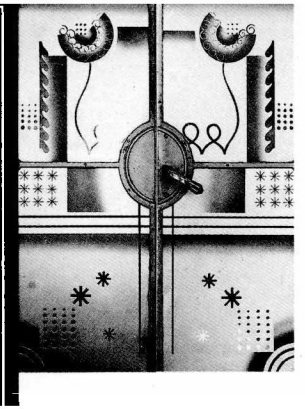
©Kazumi Yamashita　1990
Printed in Japan

発行者——角川春樹　発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三-三　郵便番号一〇二　振替東京三-一九五二〇八
電話　営業〇三-八一七-八五二一　編集〇三-八一七-八四五一

装幀者——杉浦康平　協力——赤崎正一
印刷所——新興印刷株式会社　外装印刷——旭印刷株式会社
製本所——株式会社宮田製本所
定価はカバーに明記してあります
落丁・乱丁本はお取り替えいたします
ISBN4-04-703196-8　C0395
定価一、一〇〇円（本体一、〇六八円）

昭和歳時記

山下一海



角川選書 196

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

*

昭和歳時記——山下一海

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

*

目次

はしがき　七

春

流氷　りゅうひょう　一一
春一番　はるいちばん　一四
涅槃西風　ねはんにし　一六
菜種梅雨　なたねづゆ　一九
春泥　しゅんでい　二三
春愁　しゅんしゅう　二五
卒業　そつぎょう　二八
遍路　へんろ　三三
万愚節　ばんぐせつ　三六
復活祭　ふっかつさい　四〇
ライラック　lilac　四三
西行忌　さいぎょうき　四六
啄木忌　たくぼくき　四九
虚子忌　きょしき　五一

夏

メーデー　May Day　五五
薔薇　ばら　五九
泰山木の花　たいざんぼくのはな　六三
セル　serge　六五
水中花　すいちゅうか　六八
母の日　ははのひ　七三

父の日　ちちのひ　七五
万緑　ばんりょく　七六
緑陰　りょくいん　八一
片陰　かたかげ　八三
噴水　ふんすい　八五
香水　こうすい　八八
サングラス　sunglasses　九二
甚平　じんべい　九五
ビール　bier　九七
冷房　れいぼう　九九
四万六千日　しまんろくせんにち　一〇一
巴里祭　パリさい　一〇六
塩田　えんでん　一〇九
夏休み　なつやすみ　一一五
夜の秋　よるのあき　一一八

秋

原爆忌　げんばくき　一二五
終戦記念日　しゅうせんきねんび　一二八
風の盆　かぜのぼん　一三〇
台風　たいふう　一三四
秋晴　あきばれ　一三六
水澄む　みずすむ　一四〇
コスモス　cosmos　一四五
背高泡立草　せいたかあわだちそう　一四七
林檎　りんご　一四九
雁渡し　かりわたし　一五三
鰯雲　いわしぐも　一五五
夜学　やがく　一五九
獺祭忌　だっさいき　一六三
蛇笏忌　だこつき　一六五

冬

冬麗　とうれい　一七一
白鳥　はくちょう　一七三
牡丹焚火　ぼたんたきび　一七五
雪嶺　せつれい　一七九
風花　かざはな　一八四
吹越　ふっこし　一八九
寒雷　かんらい　一九二
木の葉髪　このはがみ　一九四
熱燗　あつかん　一九九
マスク　mask　二〇二
マフラー　muffler　二〇六
ラグビー　rugby　二〇八
スケート　skate　二一一
スキー　ski　二一五
クリスマス　Christmas　二一八
数え日　かぞえび　二二二
初刷　はつずり　二二六
一月　いちがつ　二二八
近松忌　ちかまつき　二三三
一葉忌　いちようき　二三四
漱石忌　そうせきき　二三六
石鼎忌　せきていき　二三八
あとがき　二四〇

はしがき

季語は、和歌・連歌以来の長い歴史をもつものもあるが、明治・大正になって登場したものもあるし、昭和になって盛んに用いられるようになったものもある。新しい季語はいまも生まれ続けている。たえず生まれ続けていることによって、季語は日本の生きた文化であるわけだが、新しく生まれて成功する季語の数は、ひところより少なくなっているような気がする。

新しい行事をにわかに季語に仕立て上げようとしたり、地域的な珍しい習慣を急に季語に取り入れようとしても、なかなかうまくいかない。芭蕉が「季語の一つも探り出したらんは、後世によき賜（たまもの）」といったことはよく知られているが、それは捜しだしてくればいいというものではない。もの珍しさでただ新しい語をあしらったというようなことでは、季語は成立しない。その語の本意・本情、つまりは本質を知り抜き、それを正面から作品の上に生かしきって佳句を生み出し、十分に人々の共感を得たときにのみ、新しい季語は誕生する。一人の力をきっかけとすることはあっても、それだけで季語は確立するものではない。そこに多くの人の力と長い時間が加えられることによって、はじめて文芸の大きな意志が動き、季語は成熟する。

近年、俳句が盛んだといっても、量的な現象が先行して、作品の質的な充実がやや立ちおくれているようにも見うけられる。俳句の盛行が、皮肉なことに作品の希薄化を招いている点もあるのだろう。新しい季語がさまざまに工夫はされながらも、なかなか成功しないのはそのせいではなかろうか。魅力的な季語が生みだされなくなることは、この国の文化の大切ななにかが衰弱していくことである。

本書は、明治・大正・昭和の時代に新しく誕生した季語の中から、任意に選んで、その生成の事情や季語としての性格について、例句を挙げながら解説し、また論じてみたものである。昭和になって出現した季語を主としているので、昭和歳時記と名づけた。

昭和の時代は終わり、新しい平成の時代を迎え、ここで、明治・大正から、とくに昭和になって生命を得てきた季語のいくつかについて振り返ってみることは、平成のさらに魅力的な季語の誕生を期待するためにも、意味のないことではあるまい。

春

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

春はまず厳しい冬の寒さに別れる喜びからはじまる。「流氷」がオホーツクの海をおおうのは春のしるしであり、空を渡る「春一番」を、生き物たちは喜びをもって聞く。自然の現象を「菜種梅雨」や「涅槃西風」といった言葉で呼べば、雨も風も身辺になじんでくる。「春泥」に行き悩みながら「春愁」に沈み、「卒業」は青春の歌である。「遍路」に出ようかと言えば、「万愚節」のたわむれかと一笑い。「復活祭」の折から「ライラック」の花を摘む。春はまことに多感な季節である。

流氷（りゅうひょう）

「流氷」は「氷流るる」として、『連歌至宝抄』（天正一三成、寛永四刊）の「初めの春の言葉」の欄に収められて以来、諸書に見られ、近世期の歳時記類でも、早春の季語とされている。そしてふつうは、蝶夢編『類題発句集』（安永三）の、

草ともに氷流るる野川かな　蝶夢

のように、川を流れる氷が念頭に置かれている。

「流氷るる」が「流氷」と書かれて音読されるようになるのは、近代になってからのことだが、それでも明治・大正のころは、もっぱら川の氷が考えられていた。スケールの大きな海の氷がとりあげられるようになって、「流氷」は近代の早春の季語としてよみがえる。そのためには画期的な一句があった。

流氷や宗谷の門波荒れやまず　山口誓子

これは大正十五年の作で、句集『凍港』（昭七）に収める。「宗谷」という地名が、万葉語「門波」を従え、さらに「荒れやまず」という力強い否定表現を伴って、見事に大景を描ききっている。

その冠に置かれて、「流氷」の語も面目を一新する。この句によって「流氷」は、古典的な川を行く「氷流るる」ではなく、とどろき、きしみながら北辺の海を行く、自然の巨大な力を表すものとなった。

誓子の流氷の句は北海道最北端の宗谷海峡の情景だが、海一面の流氷の景観が見られるのは、オホーツク海沿岸地方である。昔は他の地方の人々にとって、オホーツク海を見に行くことは容易なことではなかった。最近は飛行機によって北海道も近くなり、東京の人でもその気にさえなれば、簡単にオホーツクの岸辺に立つことができる。

流氷の間やオホツクの底を見たり　松崎鉄之介

流氷の鼓動無尽にオホーツク　石原八束

前の句は昭和三十一年の作だから、オホーツクの流氷の句としては早いほうで、句集『鉄線』(昭五〇)に収める。後の句は昭和五十八年の作で、句集『白夜の旅人』(昭五九)にある。

サハリンの東側を南下してきた流氷が北海道に近づき、初めて岸からの視野にとらえられた日を流氷初日といい、視界内に最後に流氷が見られた日を流氷終日、その間を流氷期間という。流氷がすっかり見えなくなるのが海明けである。紋別や網走における流氷初日は平均して一月中旬、流氷終日は四月上、中旬のころだが、年々の気象条件によって、それぞれの日がひと月以上の幅をもって動く。流氷期間中でも、風向きによって、氷は離岸と接岸を繰り返したりする。見わたす限りの流氷が、一夜の風で視界から消えてしまうこともある。ときには流氷が漁船を襲って、海難事故が

おこる。そのため近年では、飛行機や人工衛星によって流氷の情報が集められ、沖合数十キロまでは、レーダーで監視されている。昭和六十三年には一月十二日付の朝日新聞に、網走沖に近づいた流氷の航空写真が、大きく掲載されていた。

流氷やたそがれきては庖丁もつ　寺田京子（『日の鷹』）

流氷に閉ざされ彼我の二ヶ岬　森田　峠（『逆瀬川』）

流氷や男に渡す蒸し卵　黒田杏子（『88年版俳句年鑑』）

相逢うて流氷背丈のばしあふ　雨宮抱星（『妙義の四季』）

春一番（はるいちばん）

安政六年（一八五九）二月十三日、壱岐郷ノ浦町の五十三人の漁師が、春のはじめの突風のために五島沖で遭難した。以来その地では、恨みのその風を「春一」「春一番」「からし花おとし」などと呼ぶようになり、その供養塔を「春一番の碑」と呼んでいる（小熊一人著『季語深耕（風）』）。小原菁々子は、昭和三十九年六月から『西日本新聞』に連載した「西日本歳時記」に、壱岐地方の言葉として「春一番」をとりあげている。ただし例句は「春一」とする。

春一に髪逆立てて海女戻る　小原菁々子

その春はじめての強い南風をいう「春一番」の言葉は、瀬戸内海から北九州地方、あるいは伊勢、志摩などの漁民の間で古くから使われていたが、それが気象用語として新聞などで用いられ、昭和三十年代の末になって季語として意識されたのである。『図説俳句大歳時記　春』（昭三九）にもすでに立項されている。

春一番死神もまた矢を放つ　古賀まり子

句集『竪琴』（昭五六）に収める。病床に親しむことの多かったこの作者にとっての「春一番」は、

怖れの気持において壱岐の人々に通じあうものがあった。漁民にとって不吉なものと感じられる強風の音は、病に臥しているものに死神の矢音とも聞こえた。

しかし、一般にこの言葉は怖れの気持より、春の到来を喜ぶ気分のものとして受け取られている。「春嵐」「春疾風」「強東風」という季語がそれまでにもあったが、「春一番」というキッパリした言い方が好まれ、たちまちこのほうがよく使われるようになり、俳句のみならず、ひところ人気のあったキャンディーズの歌に登場したりした。

春一番関東平野ゆきどまり　岡田史乃

句集『彌勒』(昭六二)の巻頭に掲げられるこの句は、「春一番」という言葉の、いわば「ひびき」をとらえたもの。

洗ひ機に人参踊り春一番　小出秋光

これは句集『一日仕切り』(昭六二)の句。農村の春の喜びを表していて、俳趣豊かである。

春一番煎薬の火を細めたり　石川桂郎(『四温』)

雑貨屋に吊るもの多し春一番　檜紀代(『呼子石』)

新聞に石のせて売る春一番　棚山波朗(『之乎路』)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo